

愛知県美術館…皆さんはどんな印象をお持ちですか？

企画展に足を運ばれることが多い方は、古美術から現代美術まで、時代も地域も幅広く多様な展覧会をお楽しみいただいていると思います。

でもやっぱり、美術館の顔はコレクション！このブログでも、作品の保存や管理から展示の仕方など、学芸員が日ごろより良いコレクション形成のために努力を重ねているところをご紹介します。

そして、その努力がいくつかの実を結ぶことがあります。その一例として、個人で所蔵されている作品を、美術館に預けていただくこと（寄託）があげられます。美術館の作品管理や活動を評価して下さっているからこそ、所蔵家の方は安心して作品を美術館に預けてくださるのだと思います。私たちはその信頼に答えられるよう、また日々精進していかなければなりません。

さて、寄託された作品は美術館の管理の下で展示され、たくさんの方にご覧いただくことができます。現在所蔵作品展の展示室7では、当館のコレクションにはないモネやシャガールなど、日本で特に人気のあるフランス近代画家の寄託作品が展示されています。当館のコレクションの特徴は、クリムト、キルヒナー、ノルデ、クプカなど、日本ではあまり見られない作家の作品にあります。もちろん20世紀の巨匠ピカソやマティスの作品もありますが、近代美術の展開をたどるならやはり印象派やその周辺もほしいところです。しかしこうしたモダンマスターの作品の入手は困難を極めるため、今回展示されているような寄託作品が、もとあるコレクションの幅を広げてくれるわけです。



↑クロード・モネ 《セーヌ川の湾曲部 ラヴァクール、冬》 1879年

この作品は、かつて松方コレクションに入っていたもの。1878年からセーヌ川沿いの町ヴェトウイユに移住したモネは、セーヌ川を挟んだ反対側にみえるラヴァクールの町の眺めを描きました。この作品が描かれた1897年の冬は厳しい寒さのためセーヌ川の水が凍ったそうです。作品に描かれたラヴァクールの景色も寒々しい感じがします。



↑マルク・シャガール 《オペラ座》 1953年

赤く染まったパリのオペラ座と、そこから延びる黄色い花を咲かせた木（幹に見える部分は数人の人物の身体が折り重なるように描かれています）、そして手前には白いコスチュームに身を包んだダンサーが描かれています。この作品を描いた10年後に、シャガールはオペラ座の天井装飾の制作を行いました。

これらの作品が展示されている展示室は、企画展の展示室に比べ空間が小さいので、作品との距離がぐっと近くに感じられます。その分、作品に親しみを持つことができる展示空間で、ゆっくりと作品をご堪能ください！

(M. M.)